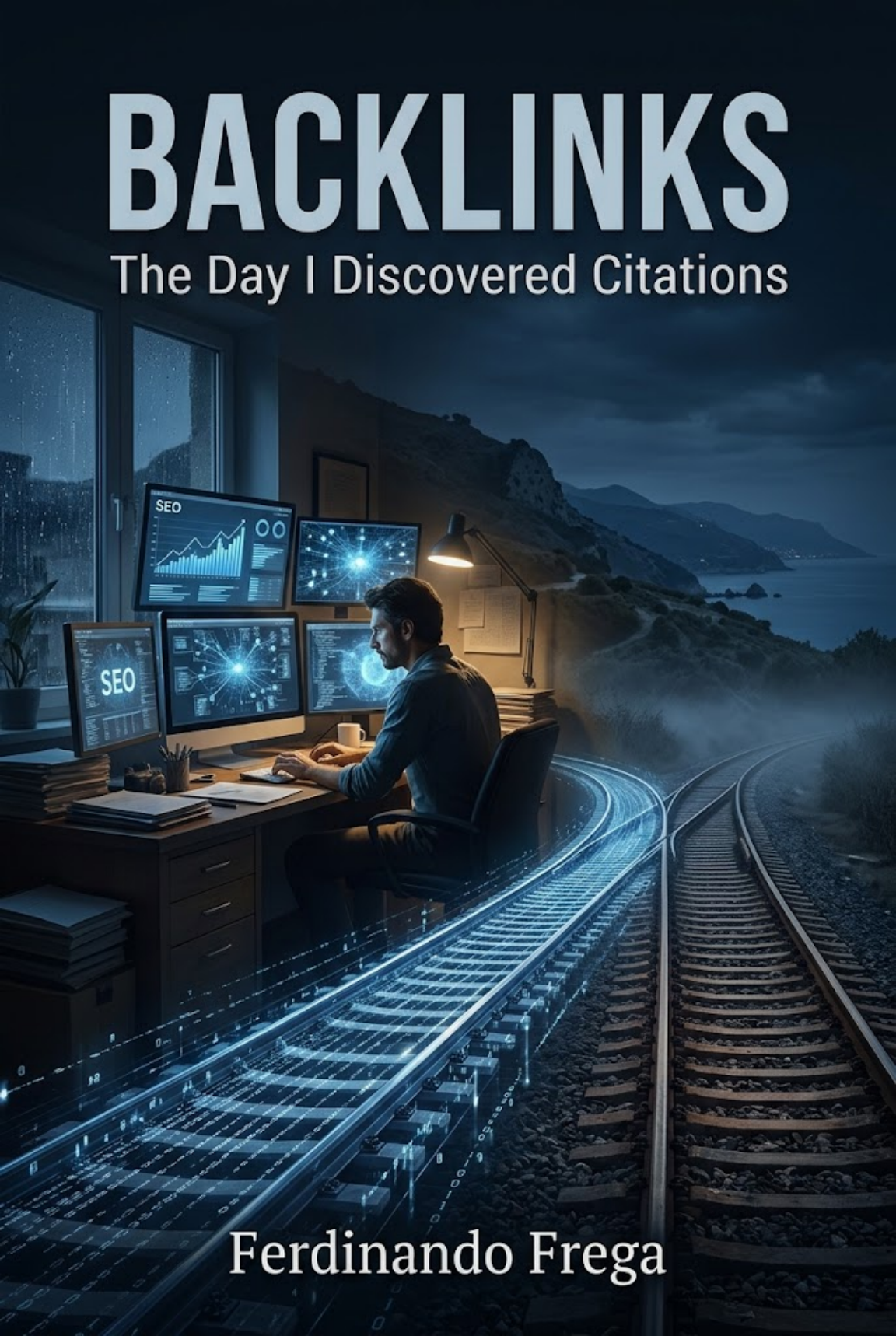
BACKLINKS

The Day I Discovered Citations



Ferdinando Frega

バックリンク

引用を知った日

The Art of Attraction · 10

ウェブでサイトがどうインデックスされているかを確かめようと、アプリを開いたばかりだった。そして正直なところ、クソほども分からなかった。

まるで、一度も見たことのない、細部をひとつも知らない商品を売りに出かけるようなものだった。

二千年前の私の同僚に、少し似ている。彼はガリラヤで言葉を売っていた。ある意味で私のカラブリアによく似た土地だ。ただし彼は学んでいた。聖書を知り、自分が何をしているのかを正確に分かっていた。

とはいえ、私たちのあいだには、ひとつ本質的な違いがあった。

彼が働いていた場所では、信用されなければ、十字架の上で終わっていただろう。

文字どおりに。

一方、私の生まれた土地では、もう少しチャンスがあった。だが多くはない。間違った言葉を口にすれば、許しも求められずに、そのまま棺に入れられかねなかった。

アハハハハハ。

いわば善意だけを武器に、私は画面やグラフや数字のあいだを渡り歩き続けた。そしてある単語に、ぴたりと足を止めら

れた。

citations（引用）。

私の記憶は、人生で受けた18件の刑事裁判の召喚状へとまっすぐ跳んだ。いったいどうやってそんなものがあんな所まで入り込んだのか、数秒のあいだ、クソほども理解できなかった。

落ち着くように言ってくれたのは、Claude, the daughter of Anthropicだった。

彼女は、カラブリア人の欠点をよく知っていた。

デスクトップのアプリを片っ端から燃やしてしまう前に、考えるようにと促してくれた。

あの引用は告発ではないのだと説明してくれた。それは承認なのだと。

サイトに権威を与え、見えるようにし、まさにその原理の上に築かれたシステムと両立させるためのものなのだと。

それがないときは、と彼女は付け加えた、ただ待つしかないのだと。

まだ自分の姓を与えてくれない父親に認知されるのを待つ、生まれたばかりの息子のように。

そこで私はさらに腹を立てた。

フレーガと呼ばれて一生を過ごしてきたのは、ベゾスになりたいと願うためではなかった。

そして、なぜ世界じゅうが、存在する資格があると感じるために同じ姓を追いかけなければならないのか、私には分から

なかった。

結局、私たちは筋の通った結論にたどり着いた。

システムは、これからも自分のレールの上を走り続ける。

私はそのあいだに、もうひとつの鉄道を敷いていた。

私の鉄道では、乗るのは無料だった。

読むのも無料だった。

事前の承認も、デジタル貴族の証明書も、承認の印も必要なかった。

N.N.、父知れずの子ではなく、GNの子として生まれた者のように。

残りは、時間が決めるだろう。

Ferdinando